

北区に息づく職人の技

技ひとすじ



愛着と誇りのもてる北区をめざして

日本には長い歴史の中で育まれてきた文化があります。そしてその文化は、各地域の先達の地道な努力により今に受け継がれてきました。

北区にも、何十年、何百年と受け継がれてきた職人の技があります。それらの伝統の技からは、私たち日本人が大切にしてきた精神や現代のものづくりの原点も見えてきます。

北区に息づく伝統工芸の歴史や北区とのゆかり、職人が生み出す美しい作品を通して、伝統的なものづくりの奥深さをぜひ感じてください。

名古屋型友禅
なごやかたゆうぜん

なごやかたゆうぜん



染
そ
め



和
わ
裁
さい

わ
さい

つげ櫛
ぐし



表具
ひょうぐ



工芸建具
こうげいいたぐ



からくり人形
にんぎよう



ふるさと北文化に親しむ会

北区民まちづくり推進協議会の部会のひとつで、北区に根づいた伝統工芸を中心にした「ふるさと文化の振興」により、ふるさと感あふれるまちづくりをすすめることを目的に活動しています。本冊子で紹介する職人たちちは、いずれも当会の特別委員です。

な ご や かた ゆう ぜん

名古屋型友禅

幽玄さを秘めた色遣い

わたなべ よしはる
渡邊 芳治

二代目美彦さんが、戦災にあった工場を昭和23年に再建。
三代目を引き継ぎ、昔の面影を残す工場で名古屋型友禅に情熱を傾けている。



友禅染めとは

友禅染めは着物などを染める技法のひとつです。京都から加賀藩の城下町である金沢に持ち込まれ、その後、江戸や名古屋へと広まっていきました。

名古屋友禅の特色

京や加賀の友禅と比べて色数を抑えており、全体的に渋めの落ち着いた色合いであることが特色です。
徳川宗春が尾張藩主であった1730年頃、この地に豪華絢爛な友禅染めが伝わりましたが、尾張藩の財政悪化で宗春が失脚したことに伴い、模様の配色が抑えられるようになったといわれています。

名古屋友禅は、京友禅、加賀友禅、東京手描友禅と並び、国から伝統的工芸品に指定されています。



型友禅の発祥と染め方

名古屋友禅は、「手描友禅」と「型友禅」に大別されます。

型友禅の技術は江戸時代に発祥し、化学染料を混ぜた色糊と型紙を用いた染めの技法として確立されたのは明治時代といわれています。

友禅模様を型彫りした型紙を下絵の代わりに用い、使う色ごとに型紙を変えて絵柄をつけます。着物によっては複数枚の型紙を使用する必要があり、場所ごとに柄が異なる振袖になると、1反を染めるのに多いもので800～900枚の型紙を使うこともあります。



型友禅で
使われる型紙

作業工程

①糊をひいた友禅板に白い生地を貼り付ける。



②柄の輪郭の部分に糊を置いていく。

③色を調合し、型紙を用いて丸刷毛で「絵付け」をする。

友禅ならではのぼかし(色の濃淡をつけること)も施していく。

④生地の地色を染める「地染め」をする。

その際、模様の部分に色が入るのを防ぐため、
「伏糊」をする。



⑤生地を蒸して染料を定着させ、水洗いで
余分な染料や糊を落として仕上げる。



職人さんに聞きました！

Q 作品を作るうえで、大変なことはなんですか？

A すべての工程が大変です。例えば、友禅板に白い生地を貼り付ける作業ひとつをとっても、まっすぐに貼らないと作業の途中で図柄がズレてしまします。また、型紙は含まれる水分の量によって伸び縮みします。1日水につけたうえで水気をとり、湿った状態を保たないと図柄が合わなくなってしまうので、型紙の状態に気を配らないといけません。色を決める色合わせ作業も、思い通りの色味を出すために配合や水分量に気を付けなければならず、簡単そうに見えて大変です。



Q 伝統の技を受け継ぐうえで 大切なことはなんですか？

A 名古屋型友禅を後世に伝えていくために、型紙や刷毛などの道具は欠かせません。しかし、それらの道具を作る職人は徐々に少なくなっています。こうした職人を守るためにも、まずは名古屋型友禅のことを1人でも多くの人に知ってもらいたいと思っています。

渡邊さんは、名古屋型友禅の技法を生かした作品作りも行っています。和紙やエコバッグに着物の図柄を型染めするなど、時代に合わせた型友禅の技法の活用法を模索し続けています。



名古屋型友禅と黒川

北区と名古屋型友禅の関わりは、渡邊さんの工房のすぐ近くを流れる黒川にあります。

反物についた余分な染料や糊のりを洗い流す作業には、きれいな水が大量に必要でした。

かつて黒川の横を流れていった御用水ごようすいには清流が流れていたために、市内に点在していた染色工場が集まってきたといわれています。

最盛期には黒川や御用水沿いだけでも数十軒くらいの工場があり、活気にあふれていたといいます。



▲ 御用水ごようすいで糊落のりとしを行う様子

黒川友禅流し

昔ながらの名古屋型友禅の糊落のりとしを再現する催しで、例年3月下旬～4月上旬に開催されています。

会場となる辻栄橋

付近では、満開の桜が咲き誇り、友禅の美しさを際立たせています。



そ 染め

現代工芸に生きる日本の美

ふる た よし たか
古田 好孝

わたなべせんこうじょう
戦前に渡邊染工場に弟子入りした父が戦後独立し、北区内に工場を築く。高校卒業後に家業である型染めを継ぎ、現在は手描きなどを交えて型染めの枠を超えたさまざまな作品を手がけている。



染めとは

布に染料を用いて色をつけていくことをいいます。
染める際には、糸の繊維を伝って染料が広がってしまうのを防ぐため、布に糊のりやロウ、糸などで狙った箇所に染料が染み込まないようにします。
染めには、型染めや手描き染め、ロウケツ染め、絞り染めなどのさまざまな技法があります。



染めの魅力

絵画とは異なり、布に色を入れていくため、布が本来持っている布地の色と染料との掛け合いに味わいがあります。
色遣いを変えたり、ぼかしやにじみをあえて出したりすることで、職人はさまざまな模様を表現します。

現代工芸に生かされる染めの技術

染めというと、一般的には着物などがイメージされます。古田さんは染めの技術を生かし、現代工芸の分野でも活躍しています。

右の写真は、「愛知の工芸2020」という作品展に古田さんが展出した作品です。

布を張るパネル作りまで自ら手がけ、さまざまな染めの技法を生かして作られています。



そら ひびき
「宙の響」

パネル作品の制作工程

①構図やデザインなどを決め原寸大の下図を作成する。

②布を木枠に張り込み、水で色が落ちる
あおばな
青花を使って下絵を描く。



③隣り合う色がにじまないよう、糊のりを使って
いとめ のりお
模様の輪郭をなぞる「糸目糊置き」をする。

④布全体の染料じいのにじみを防ぐ「地入れ」という
はけ
作業の後、布に刷毛はけを使って色をつける
「引き染め」をする。



染料が乾燥してムラができるのを
防ぐために手早く染める!

⑤水洗いや裏打ちなどの仕上げをして完成。



職人さんに聞きました！



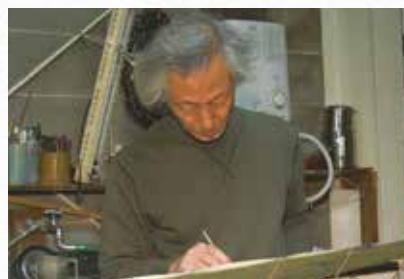
さまざまな染めの表現に挑戦するようになったきっかけはありますか？



高校卒業後に家業の型染めを継いだのですが、私が20代前半の頃、ご縁があって徳川美術館の宿直のアルバイトをしたことがありました。そこで多くの人や歴史的な美術作品に触れたことが大きな刺激になりました。

その後、日本画家のもとで日本画を基礎から学び、型染めの枠を超えた作品を手がけるようになりました。

そういうことがなければ、ここまで幅広い染めの表現をすることはなかったのではないかと思います。



作品を作るうえで大切にされていることはありますか？



デザインを大切にしています。膨大な数のスケッチをベースにして、作品のイメージを形にしていきます。デザインが決まれば、仕事の7～8割くらいは終わっているといえるのではないでしょうか。

そして、デザインから型彫り、染めまでの作業を自ら一貫して行うことで、デザインしたとおりのものを形にできることが、
自分の仕事の醍醐味だと感じています。



デザインから染めまで幅広くこなしてきたからこそ、ここまでやってこられたという古田さん。一目見ただけで、自分の作品だとわかつてもらえるような仕事をしたいと語っています。

さまざまな染めの技法



ロウケツ染め

ロウを鍋に溶かして筆に含ませ、固まらないうちに布に置いていきます。ロウの部分が染料をはじくことで、さまざまな模様が表現されます。



△ 手前に置いてあるのがロウを溶かした鍋



△ ロウを置いた部分が白い模様で表現される

手描友禅

ケーキのデコレーションのように、絞り袋に入れた糊をノズルの細い筒先から絞り出し、自由に模様を描いていきます。

糊が堤防の役割を果たすため色がにじまず、模様の内側から彩色をして最後に背景を染めています。

絵画的に自由な構図を表現することができます。



わ さ い 和 裁

「悉皆」の精神で着物をプロデュース



まきの まもる 牧野 守

松坂屋の前身であるいとう呉服店の裁縫部で働いていた先々代の祖父が、昭和21年に牧野和裁を創業。和服の仕立てを行うだけでなく、牧野和裁学院として後進の育成も行っている。



和裁とは

手縫いを中心とした伝統の技法で和服を縫い上げることをいいます。

着物文化を支える「悉皆」

日本の着物文化を支えてきた仕事のひとつに、「悉皆」があります。着物は、親から子、子から孫へ世代を超えて代々受け継がれることを想定して、作り直すことが可能なように作られています。持ち主の想いのこもった着物が大切に長く着続けられるように、寸法直しや紋の入れ替えなどの着物に関するメンテナンスを文字通り「ことごとく」一手に引き受けるのが「悉皆」です。

▼ 修復前



▼ 修復後



「和裁」と「洋裁」の違い

和裁と洋裁の大きな違いは、布の切り方にあります。

洋裁の場合は、型紙のサイズに合わせて布を裁断しますが、和裁は縫いしろを含めた布をすべて直線に裁断します。縫い合わせる際には、縫いしろの部分は見えないところに畳み込んでおくので、のちに縫い合わせた糸を外すと、縫いしろが出てきます。その縫いしろを使って、服のサイズや形を直すことができるのが、和服の大きな特徴です。

縫い合わせた糸を外すと
縫いしろが出てくる



和服が仕立てられるまで（一例）

①反物の仕上がりと長さ、幅などを調べるために、「検反」と「検尺」をする。



②生地を安定させるために、アイロンをあてて「地直し」をする。縮みやすい生地は、あらかじめしっかりと縮めてから「裁断」する。



③縫い合わせる布同士の長さが正確に合うように、「標つけ」する。



④最後に、一針一針、糸を引く力加減や縫い目の細かさを少しづつ変えながら、着物を「縫い」上げる。

工 職人さんに聞きました！

Q 和裁士は一人前になるまでにどれくらいかかるのですか？

A 最初は、運針などの基礎訓練から始めて、長襦袢(和服用の下着のひとつ)や小紋(細かい模様が全体的に入った和服の種類のひとつ)が縫えるまでに2～3年くらいかかります。国家検定1級の「和裁技能士」の資格を取得するまでに、およそ8～10年。それがプロのスタート地点と考えるならば、一人前といえるのは、それから5年くらいでしょうか。



Q 牧野さんはどのような着物に価値があると思いますか？

A 価値があるというと、豪華で値段が高そうな着物を想像する人が多いと思います。もちろん、そういう着物にも価値はあります。ですが、たとえ高価でなかったとしても、何年も着られているうちに擦り切ってしまったお気に入りの着物が、仕立て直しをしたことでもう10年着られるようになったとすれば、それは素晴らしいことです。そのように、何度も仕立て直しをして、大切にされてきた着物が、その人にとって一番価値があるといえるのかもしれないし、それが着物の特徴でもあると思っています。

子の代、孫の代と着物が受け継がれることを想定して和服を縫っているという牧野さん。大切なものを長く着ができる「無駄を生まない」和服の特性を、多くの人に知ってもらいたいと語っています。



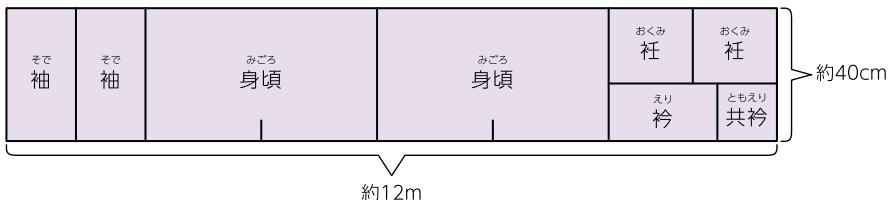


着物の部位と布の裁ち方

布1反(縦約40cm・横約12m)から、大人1着分の着物が作られます。

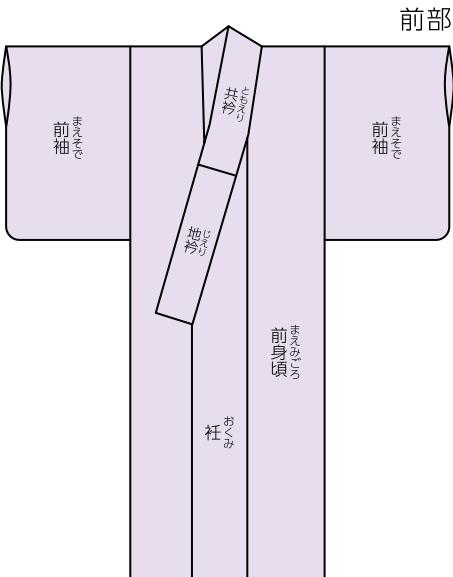
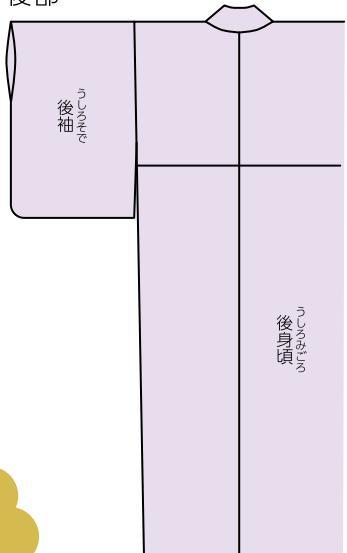
例えば長着の場合、以下のように布を裁ちます。

裁ち方



完成図

後部



ともえり えり
共衿:衿の汚れを防ぐために、
えり
衿の上からさらにはけた衿のこと
おくみ まえみ ごろ
衽:前身頃に縫いつける細長い布のこと



つげ 櫛

日本伝統の髪型を守る



もり しんご
森 信吾

高校卒業と同時に、明治36年創業の櫛留商店の三代目となる。平成18年、厚生労働大臣表彰「現代の名工」を受賞。平成29年には、天皇陛下より「黄綬褒章」を授与された。



つげ櫛とは

木目が細かいツゲの木を使って作られた日本の伝統的な櫛のことです。
力士や歌舞伎役者などの、日本伝統の髪型をつくるのに欠かせないもので、源氏物語にも記述があります。

つげ櫛の種類

芝居の世界で使われるつげ櫛は、男性用や女性用、お母さん役用、娘役用など用途が多く、形は何百種類にもなります。

それに対して、相撲用の櫛は下の4種類です。

「荒 櫛」…もつれをほぐす

「すき 櫛」…砂や汚れを取り

「揃 櫛」…髪をときそろえる

「前かき 櫛」…十両以上が結う大銀杏に使われる



荒櫛



すき櫛



揃櫛



前かき櫛

つけ櫛ができるまで

- ①樹齢数十～百年以上の板を鹿児島県で仕入れ、軒下で1年間陰干しにする。

木が含んでいる水分が抜けて、
木に曲がりや歪みが出てくる!



- ②曲がった板同士を鉄製の枠で締め上げ、煙で3カ月ほどいぶした後、室内で3カ月ほど乾燥させる。小さい板なら2～3年、大きい板なら10年以上もこの工程を繰り返す。



- ③煙で真っ黒になった板をかんなで削り、木目を確認する。

木目が荒いものは歯の荒い櫛に、木目が細かいものは歯の細かい櫛にする!



- ④丸ノコなどを使って歯作りをした後、トクサ(研草・表面がザラザラした植物)の皮で櫛の歯1本1本を何千回も磨き上げる「歯摺り」をする。



▲ 磨き上げた櫛は、頬にあてて感触を確かめる

職人さんに聞きました！

Q 櫛留商店の櫛と普通の櫛の違いは
どんなところだと思いますか？

A 多くの人は、工場で大量生産された櫛しか知らず、櫛は簡単に手に入るものだと考えていると思います。ですが、櫛留商店の櫛はトクサを使って何千回も磨いて作られています。そのように丁寧に磨かれた櫛で髪をとくと、静電気が起こりにくく、髪が痛みにくいのです。



とくだけて髪がツヤツヤ、サラサラになるので、櫛留商店の櫛は、「究極の櫛」、「魔法の櫛」と言われることもあります。

Q どのような想いで櫛を作り続けているのですか？

A 仕事に関しては、「誰にも負けたくない、負けない」といつも思っています。というのも、プロの床山さん（力士や役者の髪を結う人）と仕事をするので、そういうた櫛一本で生活をしている人にも文句を言われない、言わせないという気持ちでこれまでやってきました。

今は一般の方への販売が多いですが、同じように一本一本手作りで、気持ちを込めて届けるというこだわりを持っています。

常に高い目標とこだわりを持って仕事を続けてきた森さん。何千もの種類があるといわれる日本の伝統的な髪型の文化を支えている責任を感じながら、櫛を作り続けているとのことです。



くしとめ 櫛留商店の歴史と日本文化



くしとめ 櫛留商店は、初代である森留松さんが四日市で修業をしたのち、
もりとめまつ 明治36年に創業し、昭和21年に北区に拠点を移しました。

くし 戦争が終わった直後であるこの時期は、生活の洋風化に伴い櫛の
需要も激減していました。

ここで、2代目であった森健三さんは相撲と歌舞伎に
注目しました。

力士や歌舞伎役者などの日本古来の髪型を結うために、
くし 櫛は必要だと考えた2代目健三さんは、昭和30年の名古屋場所で
支度部屋に何度も通い、櫛を作らせてほしいとお願いした
そうです。

くし その誠意が認められ、相撲の櫛を作ることになった櫛留商店。
くしとめ その信頼は3代目となった森さんの代まで受け継がれ、
とこやま 髮を結うプロの床山さんにも認められています。



ひょうぐ 表具

文化財を守る再生の技



すぎやま まさづみ
杉山 正純

小学5年生の頃から、表具師であった父の手伝いをしていました。高校を卒業後、3年間かけて東京の表具店3店で修行をして見聞を広め、平成5年に二代目として一步堂表装店を継ぐ。



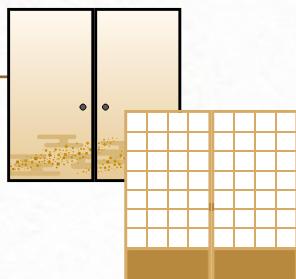
表具とは

紙や布を使って作られた掛け軸や屏風、巻物、ふすまなどのことです。表具の歴史は古く、仏教とともに中国から伝わったとされ、鎌倉、室町と時代を経るにつれて、日本独自の技術が加わり、発展してきました。



表具師の仕事

表具の修復をしたり仕立て直しをしたりする仕事です。古くから伝わる文化財や美術品の修理・修復や、寺院などの天井や壁の表装、また日常生活に密着したふすまや障子などの修理・修復も手がけます。



表具師の修復技術

表具師は、長い年月をかけて劣化してしまった文化財の修復も行います。作られた年代が古ければ、そこからにじみ出る古さまで再現するため文化財の修復では、作業に1年以上かかることがあります。

杉山さんが修復を手がけた文化財のひとつである光明院の「刺繡涅槃図」は、総刺繡で仕上げられたもので、美術的にも非常に価値の高いものです。



▲ 名古屋市指定文化財
「刺繡涅槃図」光明院(名古屋市中村区)

表具の修復過程（一例：しわや汚れのある書の場合）

- ①水を吹き、紙のしわを伸ばす。
- ②新しい和紙を裏から貼り合わせ、それを板に張って2~3日乾かす。
- ③特殊な薬品を使って汚れを取り、再び乾燥させて完成。



▼ 修復前



▼ 修復後



しわや汚れがとれてキレイな書に！

職人さんに聞きました！

Q 仕立て直すときに大変なことや、得意にしていることはありますか？

A 掛け軸だと、裂地(掛け軸を仕立てる際に使用する織物)の色合わせが大変です。作品のテーマに合わせて、膨大な種類の中から選んでいきます。どの組み合わせがいいのか迷い、裂地(掛け軸)を選ぶだけで1日以上かかることも珍しくありません。

得意にしているのは、絵画です。元々絵を描くのが好きで、イタリアで個展を開いたこともあります。絵画の技術を生かしてオリジナルの掛け軸も作っています。



Q 表具師のお仕事のやりがいはなんですか？

A ボロボロになって自分の元にやってきたものをきれいに再生して、お客様に喜んでもらえると励みになります。

どんな仕事が来ても面白いですし、基本的にどんな依頼も断りません。難しい仕事であればあるほど挑戦する意欲が湧いてきます。例えば、昔の有名な方が手がけた書や絵画などの修復の依頼が来るとやりがいを感じます。

他の人が受けてこなかったような難しい仕事も受けてきた自負があると語る杉山さん。長年の経験から培われたその技術と感覚で、表具に新しい命を吹き込んでいます。





杉山さんが手がけた作品



国指定重要文化財

天草四郎陣中旗(レプリカ)

提供:天草市立天草キリスト教館

しまばら あまくさ
島原・天草一揆(1637年)において、天草四郎が使用したと伝えられる陣中旗のレプリカです。杉山さんが実物をもとに忠実に再現しました。

天井画

松音寺(名古屋市北区)

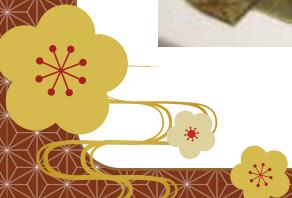
杉山さんがデザインから制作までを一から担当しています。表具だけでなく、絵画も手がける杉山さんならではの作品です。



船庄屋装束(レプリカ)

一宮市尾西歴史民俗資料館所蔵

江戸時代に木曽川の渡船を管理していた船庄屋が着ていた装束のレプリカです。杉山さんが実物をもとに忠実に再現しました。



こう げい たて ぐ 工芸建具

き か がく も よう
幾何学模様が織りなす日本の技

かわむら ひろゆき
河村 浩幸

小さな頃からものづくりが好きで、職業訓練校の木工科に通ったのち、木工家具の職人の下で修行を積む。現在は、先代が創業した建具屋で、建具職人として働いている。



建具とは

日本の伝統建築の特徴でもあるふすま・障子・間仕切り戸など、和の空間と空間の仕切りのことです。見た目が美しいだけでなく、閉じたままでも光を部屋に取り込むことや、通気性を確保することが可能で、機能的にも優れているのが特徴です。



装飾としての「工芸建具」

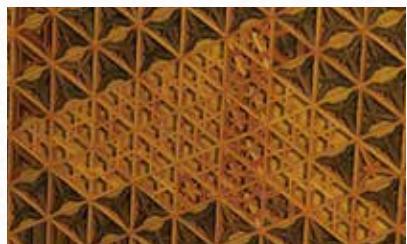
小さな木片を組み合わせることで、障子や欄間などにさまざまなデザインを施したものを作成する工芸建具と呼んでいます。



建具職人の「組子技術」

工芸建具の魅力を生み出しているのが「組子技術」です。

木の色や形を変えながら、小さな木片を組み合わせて、さまざまな模様を描き出していきます。その作業では、釘などを用いることなく、多くを手作業で行います。職人の繊細で緻密な技術から生まれるデザインは、絵画や幾何学模様など、思わず目を奪われるようなものばかりです。

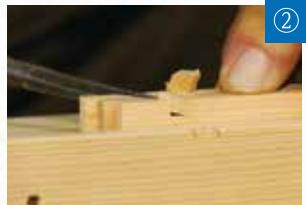


建具ができるまで（一例）

①手やパソコンで図面を書き、それに合わせて材料となる木を木目や色の組み合わせまで考えながら集めます。



②材料に「ほぞ切り」と呼ばれる、木組みを固定するための切り込みを入れます。



③やすりなどで表面の仕上げをしてから丁寧に組み立て、できあがった建具を建物に取り付けます。

すべての寸法を正確に計算し、木と木をピッタリはめるためには、高い技術と豊富な経験が必要!

職人さんに聞きました！

Q 建具を作るうえで、大変なことはなんですか？

A

もちろん加工も難しいですが、どんなものを作るかというデザインを考えることや、木の種類を使い分けることで表現する色遣いの部分は、非常に難しいです。また、木材は周りの湿度の影響を大きく受けます。湿度の低いときに木を組むと、湿度が高くなったときに膨張して伸びてしまうのですが、それが大きいものになればなるほど伸び縮みが大きくなってしまいます。組み終わった後の締まり具合を考えて組み立てるためには、経験や知識が必要です。



Q

伝統を受け継ぐうえで、心配していることはありますか？

A

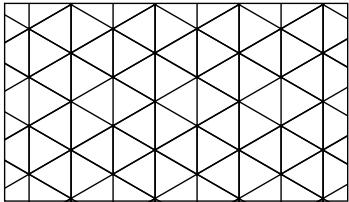
今は機械化が進んで、木の加工技術はとても向上しています。一方で、手作業による昔ながらの工法や技法が未来へ受け継がれていくのか心配ですし、それをどうやって伝えていけばいいのか考えています。また、建具は一般の方からの認知度が低いと感じているので、建具のことをもっと知ってもらうために、小学校の出張授業に出かけたり、中学生の職場体験を受け入れたりもしています。

非常に多彩で奥が深い組子の技術は、少し知るだけで「面白い」と感じてもらえるのだそうです。そんな工芸建具の魅力をたくさんの人々に伝える使命を感じていると河村さんは語っています。



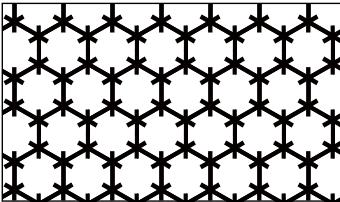
さまざまの種類

たくさんの組子の中から一部を紹介します。



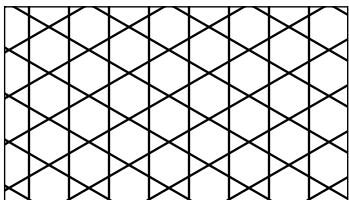
三つ組手

三方向からなる格子を組んで作られる模様です。亀甲などの模様を作り出す場合の基礎となります。



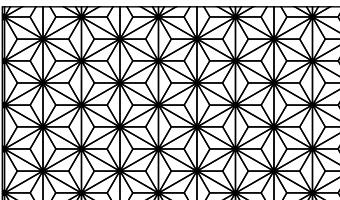
角亀甲

三つ組手から六角形内の継ぎの木を切って作られます。角を出しているように見えるため、角亀甲と呼ばれます。



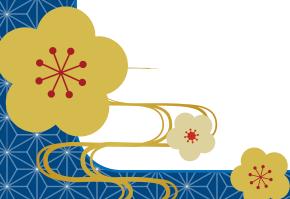
籠目

編み籠の目のようになることから籠目と呼ばれます。鬼が嫌うという言い伝えから、浴衣にも用いられた柄です。



麻の葉

形が麻の葉に似ていることからついた名前です。麻は丈夫でまっすぐ育つことから、子どもの産着の柄にも使われます。



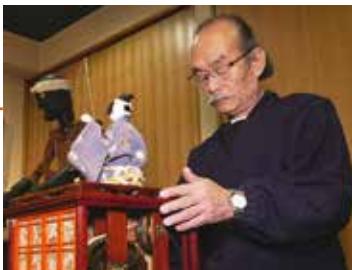
からくり人形

からくりに見た「ものづくり」の原点



くだい たまや しょうべえ 九代 玉屋庄兵衛

平成7年に、兄である八代の跡を継いで九代玉屋庄兵衛を襲名。北区内の工房で、日本各地の山車からくりの修理・復元、創作からくりの制作を行っている。



からくり人形とは

糸やゼンマイ、歯車などの仕掛けを使って動く人形のことです。電気を使わず、職人の腕と精巧な仕組みによって動くからくり人形は、まるで「木製ロボット」のようです。

からくり人形の発展

からくり人形が本格的に発展したのは、江戸時代に入ってからといわれています。寛文2(1662)年、大阪で初代竹田近江からくり人形一座が旗揚げしました。日本各地で巡業し、評判を博したことで、多くの日本人がからくり人形を楽しむようになったといわれています。



からくり人形の種類

① 舞台からくり

あうみ

竹田近江からくり人形一座に代表されるもので、舞台の下に入っている人形を動かしていました。後に、大阪では人形淨瑠璃、江戸では歌舞伎、そして尾張では「山車からくり」に進化、変遷していったといわれています。

② 山車からくり

だし

お祭りで使われる山車に載せられたからくり人形です。山車を用いたお祭りは全国にありますが、からくりが載っているものは旧尾張藩領を中心に点在しています。愛知県には約400輌の山車があり、そのうち約3分の1にからくりが載せられているといわれています。この地方にあるからくりのほとんどの修理・復元を行ってきたのが歴代の玉屋です。

だし
山車からくり

③ 座敷からくり

公家や大名が楽しむおもちゃとして発展し、江戸中期以降に数多くつくられました。その中でも代表的なものが「茶運人形」や「弓曳童子」です。

ちやはこびにんぎょう
▲ 茶運人形

両手に持つ茶たくの上に茶碗を載せると、客の方へ向かい、客が茶碗を取ると止まる。そして、客が再び茶碗を載せると、元の場所へと戻っていく。

ゆみひきどうじ
▲ 弓曳童子

矢台の上にある矢を手に取り、数メートル離れた的に向かって射る一連の動きは、人の動きを見事に表現している。

工 職人さんに聞きました！

Q からくり人形を修理・復元するうえで、大変なことはなんですか？

A 人形の顔を作るのが大変です。修行していた頃は、いくつも能面を彫って技術を磨きました。中でも特に、「山車からくり」の全面修復にはすごく気をつかいます。地域のお祭りで使う山車に載せられるからくり人形の顔は、「町内の顔」といえます。そのままの顔で新しくしなくてはいけませんので、大変な作業です。

また、同じ材料を使って修理・復元しなければいけないことも大変です。中には、バネに使うクジラのひげなど調達するのが難しい材料もあります。



Q からくり人形の修理・復元以外に、どのような活動をされているのですか？

A 見学の依頼に応じて工房を公開したり、各地でからくり人形の実演をしたりしています。カナダ、ポルトガル、ロシアなど、海外で実演をすることも多いです。

修理・復元だけでなく、国内外でたくさんの人にからくり人形を知ってもらえるよう活動している九代玉屋庄兵衛さん。いすれは、初代のからくりの復元にも挑戦したいと語っています。



玉屋のからくり人形と名古屋

享保15(1730)年、尾張藩七代藩主となった徳川宗春は、社会を活性化するためのお祭りや芸能を奨励したことから、多くの人や文化が名古屋に集まり、「芸どころ名古屋」として名古屋は大きく発展しました。同様に、お祭りで使われる山車だいしについても、江戸時代に年々豪華絢爛けんらんになっていきました。またその頃、あるからくり人形師が京都から名古屋城下玉屋町(現在の中区丸の内)に移り住み、その町名にちなんで、玉屋庄兵衛と名乗りました。これが、「玉屋」のルーツです。



▲名古屋市指定文化財「山車揃」
名古屋まつり



▲名古屋市指定文化財「山車揃」
名古屋まつり

それ以来、約290年に渡って、この地で「玉屋」がからくり人形に向き合い続けている間、名古屋を中心とした東海エリアは、自動車産業を主としたものづくり産業を発展させてきました。精巧で緻密な技術を必要とするからくり人形の発展が、このエリアのものづくりの精神を育んできたといえるのかもしれません。

技ひとつじ －北区に息づく職人の技－ 令和3年3月発行

協 力：ふるさと北文化に親しむ会
編集・企画：名古屋市北区役所地域力推進室
名古屋市北区清水四丁目17番1号
TEL:052-917-6433 FAX:052-914-5752

※本冊子に掲載されている内容は、令和3年3月時点のものです。
内容は変更される場合がありますので、ご注意ください。

本冊子の内容を映像でも紹介しています！
北区ウェブサイトからご覧ください。

